

教育とは 『未見の我』を 引き出す営み

朝の会で歌う今月の歌は、「Smile Again」(中山真理作詞・作曲)。

1年生は、手鏡を持って口が大きく開いているか確かめながら歌っている。2年生は体を左右に揺すりながら、3年生は声が学校中に響き渡るような大きな声で歌っている。学年が進むにつれハーモニーや強弱に気をつけて丁寧に歌うようになってくる。6年生では歌詞の書かれた模造紙に、歌うときの留意点が示されている。1年生から6年生までの子どもの成長過程が見え、1年間でずいぶんと成長するのだなあと改めて感じる。

しかし、このような変化は自然発生的に生じるものではない。子どもの成長は取り巻く環境に大きく影響される。どのような生活環境に育つか、どのような教育を受けるか、どのような人に出会うか、どんな本に出会うか、である。

詩人、安積得也の詩に「未見の我」がある。それは、人は誰でもそれぞれ自分の内に潜んでいてまだ出会っていない(知らない)「可能性」を持っている、ということ表現している。

岩手県立大学初代学長の西澤潤一先生は、子どもの可能性を信じ、子どもが「未見の我」に出会うように導くことが親や教師の使命であり、教育の営みであると語った。

それは、どういうことなんだろうか。子どもに塾や習い事を押しつけることではない。子どもの気まますを認めたり、子どもが人に迷惑をかけたり悪いことをしても、それは個性だから、と許すことでもない。子どもの将来を考えた本当の愛情には厳しさがある。

子どもに関心を持ち、子どもの夢や目標を支え、「和顔愛語」で接し、時には心から叱り、人と比べずその子の努力や成長を認め、親や教師としての価値観を示し、、、う～ん、難しい！ 教育とは、大人の生き様自体が問われる営みでもあると言えそうです。

